梶井基次郎『城のある町にて』

川副国基

昭和五年に学校を卒業すると、わたしは、三重県の松阪にある県立工業学校の国語教師として赴任した。ひどい就職難の時期であったが、わたしは幸運だったのであろう。

昭和五年というと、まだ左翼の運動がさかんなころであった。小林多喜二の「蟹工船」や徳永直の「太陽のない町」といったプロレタリヤ文学の代表作もその前の年あたりに発表されていたはずである。秀才といわれた学友たちは、そういう方面の運動に幾人も身を挺していった。一時は、明日にでも革命がくるというような緊迫した状勢さえあった。勇気のないわたしなどは橋の手前に佇立したままであったが、そういう状勢に背を向ける連中はまた逆に頽廃的なもののなかに溺れていった。エロ・グロ・ナンセンス時代ともいわれていた。

思想的な動揺のほかに、わたしには、小説を書くことに専念すべきか、それとも教師に徹底すべきかという悩みもあった。一方には、ひとりの人を思いながらついに遂げられそうにもない苦しみもあった。暗い、わたしの青春彷徨の時期であった。いまでも「青春」というと、わたしには、暗い重いものとしか響かない。

赴任した学校は、松阪の町の西北、文教地区ともいうべき旧城趾のすぐ下のところにあった。木造校舎の外壁は真赤なペンキで塗られ赤壁校ともよばれていたが、その外装の赤い色が、うしろの蒼蒼とした城趾の下の四五百（よいほ）の森の緑に映発していた。県下に唯ひとつの工業学校で、もう二十年ぐらいの歴史を経ていたであろう。

当時のわたしには、わたしなりの若い教育者的な理想も抱負もあった。しかし、伝統のある学校ではどこでもそうなのであろう、すでに校風にひとつの型ができていて、世間知らずの青年の新しさを受け容れてくれる余地はなかった。わたしは若さのやり場がなく、たちまち、教員室での余計者になってしまった。内心の鬱屈懊悩と環境へのなじみ難さから、ひどい孤独が襲ってきた。わたしの気持は、一時に、弟のような生徒たちの上に傾斜・横溢していったのだが、生徒たちに人気があるということは、また校長から警戒され白眼視されるところとなった。

城趾は、学校から歩いても五分とかからなかった。城の櫓はすでに遠いむかしからなく、四百年前に蒲生氏郷が築いたという堅牢な石垣が、巨大な石を積み上げて三層の高さになっており、ひそやかに戦国の歴史を秘めていた。松阪の町でいちばん高い場所がこの城趾であって、そこからの眺望は、さすがに、暗いわたしの心を、時にはればれとさせてくれた。小さな松阪の町はすでに眼下にあるし、北の方、町並の尽きたところからはひろびろとした田野がそのまま青い伊勢湾の海まで続いていた。東方には遥かに小高い山なみが連らなり、そこはもう神宮のある宇治山田であった。城趾には、本居宣長の清楚な旧居がそっくりの姿で移され保存されており、宣長が古事記伝の完成に精進したというその旧居の二階の四畳半に、ひとりねころんでは、いろいろなことに思い耽ったりした。

そのころのわたしは、まだ梶井基次郎という作家の名を知らなかった。梶井の名がわたしなどへも知られはじめたのは、梶井の死（昭和七年）後、最初の全集が出版されてからであろう。それは昭和九年のことである。

梶井の作品では「檸檬（れもん）」や「路上」など、教科書にも採られて有名であるが、「城のある町にて」も好ましい作品である。この「城のある町」が、すなわち松阪の町なのである。梶井はこの作品を大正十四年に発表した。

年譜に就くと大正十三年のところに「……七月、結核性脳膜炎にて異母妹八重子を失う。創作の意旺んに動く。……八月、三重県飯南郡松阪町殿町の義兄宮田汎方に遊び、『城のある町にて』のスケッチをする」とある。わたしが赴任するちょうど六年前、梶井はこの松阪の町にしばらく足をとどめていたことになる。

梶井と三重県との縁は浅くない。安田合名会社の社員であった父の転勤に従って明治四十四年、数え年十一歳の梶井は三重県鳥羽町に東京から移り住み、やがて大正二年には県立第四中学校（宇治山田所在）に入学、それからまた父の転勤に従って大阪に移り住み府立北野中学校を卒業するが、大正九年第三高等学校（京都）の学生のとき肋膜炎を病むと、三重県北牟婁郡船津村の義兄宮田汎（姉富士の夫）のところでしばらく療養につとめている。

梶井は異母弟や異母妹を愛した。異母弟が大正四年北野中学校を中退して商家に奉公することになったときには、すまないといって自分も北野中学校を退校しているし、また異母妹が大正十三年七月二日なくなったときには「小さな軀が私達の知らないものと一人で闘っている。殆んど知覚を失った軀にやはり全身的な闘いをしている」といたましくその臨終を見守り「大きな虫が小さな虫の死ぬのを傍に寄添ってゐる―」という自分たちの無力な姿を思っている。

大正十三年といえば、梶井は五年間もかかってやっと三高を卒業し（三年間で卒業できるのだ）、東大の英文学科に入学し、

いよいよ文学への志かたく同人雑誌を出す計画をたてていた年であった。この年十一月には佳品「檸檬」を脱稿している。

わたしはかって梶井の作品についてつぎのように小著に書いた。

病み傷ついた肉体と精神から近代人の暗い憂鬱をこめた不安の気持の漂う詩のような美しい作品だ。かれの作品は小説というよりも小品ともいうべきものが多いが、対象のなかに自己を再生させる象徴的写実によって、志賀直哉の的確な写実に学びながらも別に明確鮮烈な詩的美を造型した。鋭い詩人的感受性が傷ついた近代人の不安な心理のかげりをまことに繊細にあざやかにとらえている。……「檸檬」は「えたいの知れない不吉な塊が私の心を終始圧えつけてゐた。焦燥と言はうか、嫌悪と言はうか―」という文章ではじまっている。梶井は病魔のために肉体をむしばまれてきている。そこからしょっちゅういらいらした焦燥感ももらし、神経衰弱のような兆候もあらわれる。と、思われるのだが、梶井はつづけて「結集した肺炎カタルや神経衰弱がいけないのではない……いけないのはその不吉な塊だ」と書いている。本人は、病気のせいでもなく、その病気からくる神経衰弱のせいでもないといい、「不吉な塊」のせいだといっているが、その不吉な塊とは、おそらく大正末期から昭和初期にかけて知識人をいっせいにおそった漠然とした不安の気持をこめているとも思われるし、あるいはひろく近代人の上を襲う精神の傷つきを「不吉な塊」と見てよいのではなかろうか。

（「小説読解の理論」）　明治書院刊

考えてみると、松阪赴任ごろのわたしは精神彷徨の方面でおそらく梶井と相似たようなところもあったのではないかと思う。そのころのわたしは結核ではなかったが自分の健康にも自信はなかった。六年を隔てているが、あとで「城のある町にて」を読むと、わたし自身が、城趾に立っているような錯覚を覚えたのであった。この作品にわたしが特に親近感を感ずるのはそういうわけからであろう。

梶井は異母妹の死の衝撃からのがれる思いで、まだその五七忌もすまないうちに、松阪町の義兄宮田汎氏の家に来たのであった。汎氏夫人である梶井の姉の富士はどこかの学校の教職にあった方であるようだ。義兄の家のあった殿町は城のすぐ周辺の町で、むかしの武家屋敷のあとであろう。この町に来て梶井の心は久しぶりに平安なものになった。「珍らしく静かな心持がやって来るやうになった」と梶井は書いている。

「城のある町にて」は「ある午後」「手品と花火」「病気」「勝子」「昼と夜」「雨」の六編の小品から成っている。

「ある午後」のなかに書かれている、田に湧いたうんかを除虫燈で焼き殺す行事は、わたしがいたころもあったようだが、いまの松阪でも行なわれているのだろうか。殺虫楽が普及してそんな手間はもうかけないのであろう。夜となると青年たちが

通っていく「遊廓」というのは、松阪の町の伊勢市寄りにあった愛宕町の「東廓」のことであろう。松阪には、町の西にも遊廓がありそれを「西廓」と呼んでいたが、梶井が松阪に来たころは東廓の全盛時代であった。城趾から見える三階建ての旅館というのはたしか翠松閣とかいったように思う。小さい軽便が海の方からやってくる、というのは、いまはもうなくなったが松阪の外港の大口から山の手の大石の方に敷かれていた鉄道のことであろう。「薪」を燃料にして走っていた汽車である。この城趾から遠くの入江を眺めながら、「特別心を惹くようなところはなかった。それでゐて変に心が惹かれた。なにかある。ほんとうになにかがそこにある」といい、それは「淡い憧憬」といったふうの気持であり、異人種が住んでいるようなところとも思える、というのは、梶井の独特な、詩人的感覚のせいであろうし、また疲れ傷ついた梶井の神経のせいでもあろう。こういうところはいかにも梶井的である。この入江はその後次第に殺風景に埋め立てられていまはむかしの情緒はなくなっている。「ハリケンハッチのオートバイ」にのった医者の姿は、いまでも五十代の松阪の人たちは記憶しているという。そのころ「ハリケーン」という映画があってその辺からきた名前であったようだ。

「手品と花火」では梶井が姉の子の勝子（本名は寿子）を大変にかわいがっている気持が自然に描かれているし、甘やかされ大事にされている勝子の姿も目に見えるようだ。松仙閣というのは城趾の極く近い周辺の丸の内というところにあったこの町の高級料亭で、いまはその跡に市営の結婚式場が建てられている。義兄の妹の信子（本名は房子）の、素直な人柄に好意を感じている梶井の心も、またやさしいものだ。

「病気」と「勝子」とは、まさに掌編であるが、ともに心にくいほどの描写の冴えがあり、梶井自身の心象もよく写されている。志賀直哉の文章かと一読して思いちがいをしそうだが、そこにはやはり梶井独特の心象がある。たとえば「病気」の、勝子が川に流されて溺れそうになったところを病人の父親が飛びこんで救いあげるところは志賀的描写であっても、そのことに責任を感じた祖母が、その後、頭がぼけてしまうところに着眼しているのは梶井的だというのである。

「昼と夜」のなかにある城壁の下の「立派な井戸」というのはいまは所在がわからないのではなかろうか。

「雨」では、義兄の妹の信子の出発を見送る情景が描かれ、梶井のやさしくなった、暖い心がにじみ出ている。好意を感じていた信子とのわかれ、そこで、また梶井もやがてこの松阪を去るのであろう。

同じ松阪の町にしばらく足をとどめていた梶井に、すでにこんな佳品があることを知ったなら、わたしは、松阪で、小説家になろうなどと悩みはしなかっただろう、といまでも考える。同じ土地に住み、同じ風景、習俗に接し、似たような心の傷つきを持ちながらも、さすがに不世出の詩人の眼はちがうものだと感じ入ったのは、もちろん、松阪の町を一年もたたないうちに去り、千葉県の中学校に移り、やがてまた東京の府立一中の教師になったころであった。そのころ、わたしはもう小説を書く思いをある事情でぷつりやめていた。